

やがて車は、渋川伊香保インターの次の、赤城インターチェンジで高速道路を下りた。

ETCレーンをゆつくりと通り抜けて、渋川方面を示す表示のとおりに、丁字路を左折。いくらもいかないうちに、右手に、整備された駐車スペース<sup>\*3</sup>が見えて、里美ちゃんが「その駐車場に入つて」と言った。えっちゃんは言われたとおりに車を止めた。「伊香保への道順を確認するわ」

\*3 ポケットパーク  
県道大間々子持線の道路脇に地元ボランティアが整備している小さな駐車スペース兼休憩所。眺望抜群。榛名山、小野子山、子持山、谷川岳などが見える。

「そうね。予定と違うところで下りちゃったし、よく見ておいたほうがいいわね」

里美ちゃんが道を調べているあいだに、えつちゃんはガイドブックの広域ドライブマップを広げて眺める。

「ええと……今この辺にいるんだから、きつと、あの山が榛名山なんだろうな」

そうだね、えつちゃん。どうやら、あの山の斜面に見える市街地の、一番上のかたまりが伊香保温泉街みたいだよ。……そういえば、夢二の日記にも、こんなふう\*4に山を振り返る歌があったねえ。『あが汽車の吾妻の川をわたる時伊香保のおねをふりかへる時』ってね。

「ねえ、江利子。道の途中に『道の駅こもち』<sup>\*4</sup>っていうのがあるから、ここでトイレ休憩していきましょ」

「そうね、道案内のほうは大丈夫そう？」

「うん。だいたい把握したわ」

里美ちゃんの答えを聞いて、えつちゃんは、車を駐車スペース

から出した。

『道の駅こもち』は、まだ新しい道路沿いの、渋川方面に向かって右手にあった。えつちゃんは方向指示器を出して右折し、駐車場に車を止めた。

車を出た二人は、「すごい風!」「さむーい!」と叫んで、小走りに建物へと向かった。

トイレに寄ったあとで、二人は地元産品の直売所へと足を向けた。そこには、野菜やキノコ、こんにゃくをはじめとする加工食品、雑貨やおもちゃなど、たくさん\*4の品物が並んでいた。冬場でも、意外に農産物があるもんだね。しかも、どれも新鮮で、安い。

えつちゃんが「帰りがけなら買い物してくのに」と言えば、「日持ちするものなら今買っても大丈夫よ。あしたの夜には帰るんだし」と里美ちゃんが応えた。それで、二人それぞれに買い物をした。

\*4 道の駅こもち

駐車場、トイレ、観光案内コーナー、食事処、直売所がある。かつて「白井宿」と呼ばれて栄えた歴史的な場所の一角に位置する。白井宿は、鎌倉時代中期、関東管領上杉氏配下の長尾氏が築いた白井城の城下

町として繁栄した。道の駅に隣接して、あずまやや水車小屋のある「白井まちなみ公園」がある。

■休業日／毎月第3火曜日

■営業時間／地場産品直売所9時～19時、お食事処「食創庵」11時～19時

■住所／渋川市白井2318-1

道の駅を出たあとは、里美ちゃんの道案内で、車は渋川市街へと向かった。

途中のどこかでお昼を食べようということになり、『四ツ角』という信号を少し過ぎたところに見つけた『けむりや』という、そばとうどんの店に車を止めた。

えんじ色に『けむりや』と白抜きしたのれんをくぐり、店内で二人は『おつきりこみ定食』を食べた。注文を取りにきた人に里美ちゃんが「おつきりこみって、なんですか？」と訊いたら、「このへんの郷土食でね、ほうとうみたいなものですよ」と説明された。しょうゆ味の、とろりとした汁の煮込みうどんは、二人の体を芯から温めてくれたようだ。

店を出て車の座席に収まると、えつちゃんが「さて、この先がついに伊香保ね」と言った。

「最初は『竹久夢二伊香保記念館』でいいのよね？」

「うん。そのあと宿にチェックインしてから、『伊香保ロープウェイ』に乗ってみようかと思ってるんだけど。上に展望台があるみたいだから」

「いいわね。きょうなら遠くまで見渡せそう。寒いかも知れないけど」

話すうちに、『竹久夢二伊香保記念館』に到着した。

冬枯れの森の中に趣のある建物が点在する記念館は、静けさの中で、時の流れまでゆっくりしているような場所だった。

もともと夢二の作品が好きなえつちゃんは、美人画も、スケッチ帳も、楽譜や本の装丁も、全部楽しそうに眺めてた。えつちゃんのおつき合いで入館した里美ちゃんは、入ってみたら夢二のデザインの仕事に興味を持ったようで、手ぬぐいや浴衣、半襟、便箋や封筒などの意匠を食い入るように見てた。

ミュージアムショップで絵ハガキやら手ぬぐいや、キャラメル、ワインまで買い込んだ二人は、そのあと、オルゴール館にあ

\*5 竹久夢二伊香保記念館  
「大正ロマンの森」と呼ばれる敷地内には、趣の異なる様々な施設が点在。本館「大正ロマンの館・黒船館」には、夢二の作品を中心に、照明器具や調度品にまでこだわりを持った展示がされている。別館「音のテーマ館」ではアンティークのオルゴールが懐かしい音色を奏で、平成16年開館の「義山楼」では明治・大正期の和ガラスが見られる。

■年中無休

■開館時間／3～11月／8時～18時、(12～2月)9時～17時

■料金／通常券1680円(小人1365円)、義山楼1階までのセット券2100円

※『黒船屋』の公開期間について  
夢二の代表作『黒船屋』は、毎年9月16日を中心に約2週間、特別公開。2名様以上の完全予約制のため、詳しくは記念館までお問い合わせください。

TEL 0279-72-4788

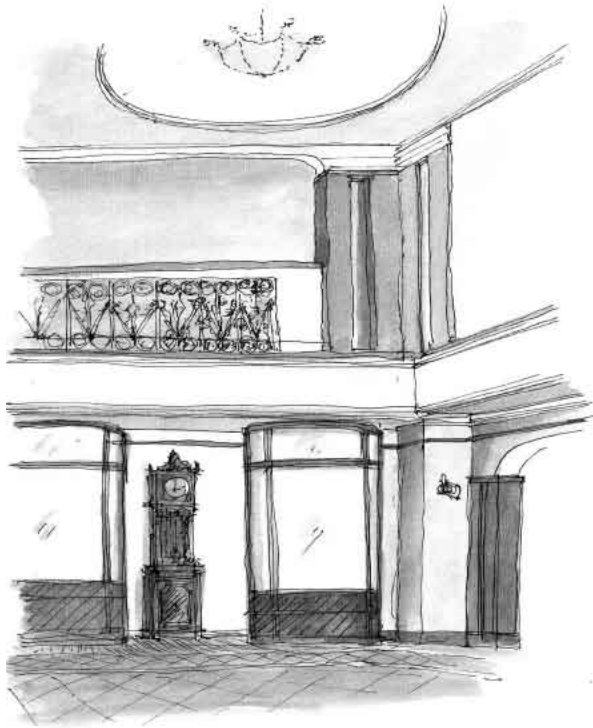
\*6 伊香保ロープウェイ

温泉街と物聞山山頂(上ノ山公園)のあいだの標高差182m・距離499mを4分間で結ぶ市営のロープウェイ。

■年中無休(点検休あり)

■運行時間／8時40分～10時まで10分おき、10時～17時15分まで15分おきに運行 ※上り最終17時00分、下り最終17時15分

■料金／大人片道480円・往復800円、小人片道240円・往復400円



る喫茶室でお茶を飲みながら、おしゃべりをした。

二人の座ったテーブルは出窓のそば。窓ガラスの向こうには、葉を落とした木々が灰色の枝を木枯らしにふるわせている様子が眺められた。寂しいけれど、不思議と心に響くその景色は、硬い質感の冬の空を背景にして、大きな切り絵のようにも見えた。

ハーブティーのカップを手にして、里美ちゃんが言った。

「夢二のデザインって面白いのね。今見ても全然古くなくて、刺激的。いいもの見たわ。誘ってくれてありがとね、江利子」

「里美にも楽しんでもらえてよかった。夢二デザインのパッケージのキャラメル、買ったんでしょ？」

「ええ。もう一目惚れよ。やさしい色遣いがノスタルジックで……タンポポの綿毛の絵もいいわ。がらにもなく子どものころを思い出しちゃう」

「使われてる色にも意味があるのよね？」

「うん。赤が『恋』、緑が『旅』、黄色が『酒』だったかな」

「今回の旅行の記念の品物としてもぴったりね」

『旅』と『酒』はいいとして、『恋』が足りないみたいよ？」

「それは自分で探して——」と言いかけたえっちゃんは、思い直したように、『恋』は、ここで夢二と彦乃の恋に触れたから、それでいいことにしたらっ？」と言った。

里美ちゃんは物思うように目を細めて、「天逝ようせいの美しき恋人、生涯の恋、か……」と呟いた。

「江利子は、一生の恋ってあると思うっ？」

「うーん……そうね、できればあつてほしいと思う。里美は？」

「私は、恋愛には賞味期限があると思ってる人よ。リアリストだから。でも、いつまでたっても少女の気持ちを忘れない江利子のは、いいなあと思うわ」

えっちゃんは「それはどうも」と苦笑した。つづけて、

「だけど、『山\*7へよする』なんて、彦乃への想いを詠んだ歌で歌集を一冊作ってしまうほどの恋なんて、ロマンチックだなあ……」

里美ちゃんは小首を傾げて、「恋愛なんていうきわめて個人的な感情を本にして世に発表するっていうのは、芸術家の性さがかし

ら？」と不思議そうに呟いた。

「あとね、あたしは黒船館の二階に飾ってあつたすぐろくも面白いと思つたわ」

「ああ、あつたわね。『お伽の國めぐり』\*8だっけ？ かわいらしくてあつさりしたタッチのイラストが、夢二のイメージとしては新鮮な感じだった！」

「それと、夢二の作品には、榛名山とか、ほかにも山を描いたものが結構あつたわね。気づいた？」

「彦乃を想つて描いた『青山河』\*9、『榛名山賦』\*10、『遠山に寄す』\*11はみんなそうね」

「それ以外にも、榛名山を描いた水彩画や素描とか、榛名に土地を得た喜びをつづつた手紙\*12の絵とか」

「きょうは朝から山を見てドライブしてきて、夢二の描いた山を見て、これから山の上の展望台に行く予定で、なんだか景色づいてる。一日ね」

「ホントだわ」

\*7 『山へよする』

絵人歌集『山へよする』（大正8年2月発行）には、大正3年から大正7年までの5年間にわたる夢二の彦乃への恋の歌が綴られている。

大正3年、東京日本橋の港屋で運命的な出会いを果たした二人の恋は、周囲からの反対を受け、人目を忍ぶ恋であった。夢二は彦乃を「山」と呼び、彦乃は夢二を「川」と呼ぶ、密かなる恋の暗号で二人は手紙を取り交わした。それはたった5年間の出来事であった。彦乃は25歳の若さでこの世を去り、その後、夢二の心から彦乃が消えることはなかった。

『山へよする』の後記には、

『山へよする』一篇は、千九百十四年十月より千九百十八年十二月まで五年間に渉る田と山との恋の記述である。また彼等の愛の祈りである。」とある。

\*8 『お伽の國めぐり』

婦人之友社発行、雑誌『子供之友』新年号の付録。縦約76cm×横約52cmのサイズで、折り畳まれて添付されていた。

すぐろくの体裁を取っているが、普通のすぐろくとは違い、おとぎ話の世界をめぐりながら進んでいくという趣向。そのため、「一回やすみ」振りだしに戻る」等の仕掛けは組み込まれていない。絵ひとコマの中には、それぞれの《お話の世界》が表現されている。

\*9 『青山河』（昭和7年）

滞米中、夢二が世話になった国際的ジャーナリスト坂井米夫氏に贈った枕屏風（油絵）。構図は、榛名の連峰が一面に黒々と描かれ、前面の左上から右下へ裸婦が横たわっている。裏面には夢二の筆で「山は歩い

記念館を出たえつちゃんと里美ちゃんは、再び車中の人となつて、湯の花まんじゅうのお店や旅館が両側に並ぶ坂道を上つていった。

「見て、江利子。道路脇の日陰に雪が残ってる」

「伊香保は山なのよねえ」

「頭では分かっても、こうして見ると実感するわね。あ！川

から湯気が上がってる」

「川から？ 温泉でも流れてるの？」

「分からないけど、そうなのかしらね？」

その、湯気の上がる川の脇にある、『伊香保支所前』の信号を過ぎると、もう目の前に今夜泊まる宿の看板が見えた。里美ちゃんが「今回の旅の、私にとつての最大の目的地に到着う」と、歌うみたいに楽しそうに言った。

「今回の宿はね、食事がいいのはもちろん、部屋もきれいだし、しかも岩盤浴と貸切風呂付きの宿泊プランにしたのよ」

「ホント!? 楽しみ！」

駐車場に車を止めた二人は、トランクに収めてあった荷物を持って宿の玄関へと向かった。

宿の入口は風情のある石畳。清められたその上を歩いて、玄関前に、二人は立った。

「ステキねえ！ 純和風の温泉宿なんて最高！ さすが江利子、趣味がいいわ」

里美ちゃんは、きょうの宿がひと目で気に入ったらしい。えつちゃんもうれしそうだね。

て来ない。やがて私は帰るだろう。榛名山に寄す」とあり、夢二の榛名山に対する思いの深さが窺える。

\*10 『榛名山賦』（昭和6年）

榛名山を背に、紅色の着物を着た女性を描いた作品。女性は、春の女神である佐保姫。添えられた和歌には、「久方の光たゝえて匂ふなり」

榛名の湖うみに春たちにけり」

とある。長く厳しい榛名の冬に耐え、誰もが待ち焦がれていた春の訪れと喜びを見事に表現した屏風絵。

\*11 『遠山に寄す』（昭和6年）

一片雲夢不相識

（いっぺんのくもゆめあいしらず）

三千里外却逢君

（さんぜんりのそとよりかえりて

きみにあう）

この世で結ばれなかった夢二と彦

乃。絵の中に描かれた男女に二人の姿が重なる。彦乃の視線は春まだ浅い川（夢二）を見つめ、夢二は遠くの榛名山（彦乃）を見つめる。「山」と「川」は、人目を忍ぶ二人の恋の合言葉。彦乃が亡くなってから11年の歳月が流れ、昭和6年、夢二の手によって、この絵の中で二人は結ばれたとも言える。

※『遠山に寄す』は、姉妹館である岡山の夢二郷土美術館所蔵作品。

（平成22年3月20日まで竹久夢二伊香保記念館にて特別公開中）